

以上のような鐵屋の解説からすると、「平法学」は、世の営みに通底する人間の心理を探求する「人間学」の側面を持ち、武術としての効用のみならず、処世、治世にも活きる「帝王学」としての性格まで有していると考えられる。

3-1-3. 船越義珍への回帰と発展

冒頭の「はじめに」(1-1)で述べたように、船越は「真の空手」すなわち「空手道」を「護身」という面から理論化し、有事に臨んで実際に身を護る「護身」としてはもちろんであるが、それに留まらず、自分自身を悪い状況に置かない(身を助ける)、ひいては自分自身の状況を好転させる(身を活かす)という処世の在り方にまでつなげる崇高な思想へと昇華させていた。船越は自身の言葉の中で「平法」という言葉こそ使っていないが、我々が船越の論考において明らかにしたように、その内容・解説について実際に記載されている文言は²⁵⁾、前節(3-1-2)に述べた内容と極めてよく符合している。

江上は井上と出会うことによって、日本古来より伝わる「平法」の存在を知り、またその体現した姿に触れることができた。しかしながら、それを辿っていくと、自らが継承する空手の師匠である船越の教えの中に、その素地が全て含まれていたことに気が付いたのだと推察される。実際に、江上は『空手道 専門家に贈る』の中で、船越が琉球の地域的な武術であった「唐手」を日本「空手道」と言えるまでに醸成させたその道筋と労苦がいかに壮絶なものであったか、またその中でどのような考えを持って行ったのか、自身が指導する「空手道」とはいかにあるべきかを探求・確立する中で追体験していったことを書き記している²⁶⁾。さらには、師匠の築き上げた道を少しでも進めるために、船越の残したヒントの中から、また井上の下での稽古の中から、あるいは門人たちとの試行錯誤を通して、その思想がいかにあるべきか、またそれを具現するための稽古とはいかなるものであるのか、開発・模索していった経緯も明らかにしている。

その中で、空手道の精神性の行く先に置いたものが本章で扱ってきた「平法」である。そのような「平法」を見据えた「空手道」の在り方として江上は次のように述べる²⁷⁾。

「本当の空手道は、武道でもなく、兵法でもない。平法として学ぶべきものである。勝負の世界の、斗争の技術でなく、更に高いもの。斗争を越えるというか、斗争の意志を、全く捨てた、本当に仲よくする為めの稽古でありたい。それが平法ではなからうか。

平法とは、大変すばらしいものであること位の知識しかないが、斗争のない世界のものと同く、真、善、美、愛、慈悲の表現としての空手道であり、その体得の為めの稽古でありたいと願う。人間本来の、あるべき姿。自然の姿とは、一体どんなものであろう。それを知るのが、「空手道」である。

真理は、何時の時代にも、燦として輝くものであり、古くからあって、而も常に新しいものである。世界も変り、コンピューター時代を迎えた今日でも、同じく価値あるもの、魅力あるもの、そんな空手道でありたい。」

船越は沖縄の武術「唐手」を普及する中で、「護身」という観点を中核に置き、その最大限の行く末として「真の空手」「空手道」という道（未来像）を指し示した。しかし、江上は自身の探求の中で、「護身」という観点すら超え、すなわち「防御精神」すらない、「和合」の道、「自他一体」の道、そうなるべく「平法」としての「空手道」を指し示し、自身の空手道思想の中核に置いたと考えられる。

3-2. 空手の技術

江上は空理空論を嫌い、実際に体現できることを基本とした。武道であれば当然のことであるが、先に述べたような武道論は抽象的になりやすい傾向があり、また、極意と考えられるものに近づくにしたがって、過去の伝書などの模倣になりがちなものである。しかし、江上はその発言の中で、「無住心剣をいくら研究してみたって、実際に出来なけりゃ、くその役にも立たんからね。我々としては、文献としてありがたいことだけどね。我々はけい古人だから、やっぱり、実際にそれを道場で具現しなければ駄目だからなあ」と語っている²⁸⁾。したがって、前節で述べた「平法」がいかに崇高な思想であろうとも、また、いかに船越の「空手道」が崇高な思想に近づこうとも、それらを実際に存在させ、体技の中で、あるいは人と人との間において具現できなければ意味がないと考え、またそれを模索したものと考えられる。

既に取り扱った加藤による「平法」の解釈に従えば、まずその前提となるのは「戦えば勝てる」実力を錬磨することであった(3-1-2)。江上は、「きく」という技の実利の追求から始め、従来からおこなわれてきた形を検証する作業を実施した²⁹⁾。例えば、従来、「足を先に出し、手が後に出るという、バラバラの動き」であり、「全身を締め固めていた」突きの姿を否定し、「力というものについて、本当に考え」、「体力、腕力というものにかたよった考え方」から「総合した人間の力」をいかに使って突くかを追求する。これは先に取り上げた転機(2-2)をもって大きく進化させたものである。そして、「腰を中心に、全身を柔軟に、拳に力を集中して、突き抜き突き通す。全身のどこにもしこりのない、柔軟にして強靱な体を作り、呼吸を止めないで、体重はもちろん、いっさいの力をこぶしに集中した動き、そんな突き」と結論づけた。また、弾力のある体に対して本当に「突き抜き突き通す」にはどのような拳の形が有効であるのかを追求する中で、従来、人さし指と中指のつけ根を当てていた正拳の形を、中指の第2関節が当

たる自然な握りの形へと変化させた。これらの変化は、従来の動きや形からすると、革新的な変化であったと言える。そして、開腹手術によって自身が十分な体力がなくなった状態でも、実際に効力があることを証明し、先に挙げた体力、腕力に頼るのではなく、「誰にでもできる」動きとして、稽古の方向性が間違っていないことを確信するに至ったと述べている。このような視点から、全ての技、動き方、稽古方法を見直し、本当の動き、自然な動き、最も効力のある動きを追求し、変化させていった。基本となる形や動きまで精査の対象としていることからその徹底ぶりがうかがえる。このような探求を江上の片腕として推進したのが各所で師範代を務めた福田稔^{ふくだみのる}や、後に独立して「新体道」^{しんたいどう}を創始する青木宏之（1936（昭和11）年-）である。

また、加藤は「平法」の次の段階として、「戦わずして勝つ」の中に3つの段階を示し、①気をもって相手を制す、さらには②気をもって敵対心を消し、最終的には③敵対心も起こらず、それを超え幸せまで感じる境地があるとした（3-1-2）。江上の師匠である船越も、慶應義塾體育會空手部創立十周年記念に刊行された『空手道集成第一巻』において「氣合術とは何ぞや」として題してこれらの詳細を示し、また晩年の著書においては師匠筋である松村や安里の挿話を用いて「氣合術」の何たるかを訴えかけている³⁰⁾。江上自身がこのような「気」の働きについて記述したものに、「平法秘奥」^{へいほうひおう}という遺稿がある。その一部は水島勝^{みずしまさる}が発行していた富士通株式会社空手道部機関誌『遊天』（108号～132号）に掲載され、高橋是休^{たかはしこれよし}発行の『空手文化』（創刊号～3号）にも転載されたが、全てを紹介する前に前者の発行は終わり、後者も2008（平成20）年以降は新刊が出ていない。内容は基本的にエピソードの形式で記載されており、若いころの様々な出来事を読み物として面白く読むこともできる。しかし、内実を検討すれば、「気」をもって人と対峙するとはどのようなことなのか、という問いかけに満ちている。具体的な内容は、大学生の折、山に籠って出会った爺様に木剣で竹を切ることを教わり、将来「遠当て」（昔、武士の乗った騎馬に気を当てて、武士を落とす技法）を教えてあげると約された話や、船越の高弟下田武^{しもだたけし}がニコニコしながら何もせずに愚連隊を平伏させてしまった話、下田先生を慕っていた空手部の先輩長谷川万年から聞いた蠅を自由に操る修行を实践した話、その原理を利用して実際に離れた人を動かすことに成功した話、そして、実際に手を出さず相手を退けた様々なエピソードや、相手の言おうとしていることが言う前に分かってしまう現象などが記載されている^{31, 32, 33)}。内容は必ずしも整序されてはいないが、いずれも気をもって相手をコントロールすること、あるいはその可能性について紹介したものと受け取れる。この原稿は1965（昭和40）年に書かれたものとされているが、それ以降に著述された本論でも取り上げている『空手道 専門家に贈る』『空手道入門』など、刊行された図書の中にはこのような形での記述は出てこない。

では、稽古の道筋として、江上は最終的にどのような方向性を示していたのであろうか。晩

年の著書『空手道入門』では、稽古の道標として、「肉体の訓練に始って精神に及び、ついに靈肉一致、心身一如、自他一体の状態を体得する」ことを稽古の流れとするよう述べている³⁴⁾。そのために、先ずは「必勝必殺の闘争の技としての追求でなければなりません。中途半端な妥協など許されるべきことではないのです。我が身を死地に置いて、いかにしたら相手を打倒せるか、いかにしたら死地を脱することが出来るか、生と死のぎりぎりを見つめて」稽古する必要があると説いている。ここでは「気」という言葉は用いられず、あくまで肉体的な稽古を基本とし、真剣に、自分と、そして相手と向き合うことが推奨されている。したがって、そのような過程を通して、自然と必要なものを身に付け、それに応じた変化に気が付き、やがて極まった境地へと到達すべきであるという道筋が描かれているものと考えられる。

もちろん、その先へのヒントを示していないわけではない。例えば、これに続く稽古の流れとして、船越の言葉と関連させ、稽古上のポイントを幾つか示唆している。1つは「自然に逆らわず」という船越の多用した言葉に関連する。この言葉から、まず自然の中の動きから学び、また私たちの動きの中にある自然な動きを探し、(1)「自然の動きを会得する。そして自然に動く。」こと、これを徹底的に追及せよと言っている。また、次に挙げているのは(2)「人間が自然に与えられた力が、どんなものであるかがす」ことであり、「現在の人間がいつの間にか忘れ去り、あるいは与えられていることすら知らないでいる自然の力、そんなすばらしい力、未開発の能力を、一つでも開発すること」であり、それ自体が稽古であると位置づけている。そして、3つ目に、(3)「相手の動きに逆らわないで、抵抗しないで、いっしょになって動く」ことを実現することを挙げている。これはまさに自他一体を意味し、「自他一体の境地を知れば、相手に突こうとする意志が動いた時、こちらの体が自然に動く、しかも相手の動きに逆らわない、本当の自然の動き」になり、そして「そのように動いた時、動けるようになった時、今までとは全く違った世界、状態が生れるでしょう」と述べている。

また、江上は「空手に先手なし」という船越の言葉を挙げ、同時に動く時、一体になった時、先手など存在しない、そのような境地に達するという。そして、このための具体的な稽古として「相手と自分との間に、いささかも抵抗対立するものがないように、それも肉体的に精神的にそうなることを心掛けること」を工夫してみるようにも勧めている。

本節の最初にも述べたように、理論で説明することと、自得することは同じではない。したがって、稽古を志す人間はただひたすらに肉体の錬磨という実践から入り、自らの成長に応じた自然と「平法」の境地を具現するしかない。気の働きもそうした中で、上記のようなヒントを基に自分自身の中で自然と沸き起こり、突き詰めた稽古の先に、初めて違った世界が現われる、と江上は最終的に位置付けたと考えられる。

3-3. 試合に関する思想

江上は試合を否定した。江上は『空手道 専門家に贈る』の中で、「真理への道、至上最高への道、空手道が、そんな道であるならば、イヤ、あせたいと思うなら、今一度、皆は船越老師の教えを思い起こして、出発点へ戻らなければならない。武道、平法としては、試合など絶対出来ないことだ。試合に勝つことが、目的となったら、それはもう、武道でもなく、もちろん平法とは縁遠いものであり、稽古する必要のない畜生道である。船越老師が「空手道に試合はない」と言いきられた所以を、本当に知らねば、道としての「空手道」など、全くわかりようがないと断言しよう。」と喝破する³⁵⁾。

これまで取り上げた平法の論理から言えば、自他一体となる境地を目指した時、争いなど生じないはずである。自分が分かり、相手がわかった時、相手を試す必要は生じず、勝負の必要性はなくなる。自らの力量を知らず、相手の力量を読み取ることもできないから、試す必要が生じるのである。そのような状態で、「試しに」戦うということは、無策のまま、ただ徒に闘争することに等しくはないだろうか。時にそれは自殺行為であり、博打のようなものになってしまう。あるいは、勝ちをただ争うことで人間的な発展が望めるのであろうか、そのような疑問を江上は投げかけているように見える。江上はこのことについて、更に同著で以下のように述べている。付言するまでもなく、試合や本来の稽古の在り方に対する考えを表現していると考えられるので、少し長くなるがそのまま引用する^{36,37)}。

「スポーツの世界、競技の世界では、追う者と追われる者との斗争によって、発展向上があり得るでしょう。単なるわざの競い合いですから、人の世は如何でしょう。

カラテを、武道として見る場合、生きるか死ぬかということになります。技の競いではないのですから。生き、死にの、セツパつまった時に、己れを如何に処理するか、相手をどうするのか、お互いに殺し合うのか。そうでなく、お互いに向上するような、お互いが立派に生きるために、何かよい方法はないのか。武道を、更に越えた、何かがないのだろうか、そんなことが、追究されてよいのではないのでしょうか。」(文献36)

「船越老師が、大変な御苦勞の末、「空手道」として、発展的に打ち出されたものを、実際には、其の通りの稽古をしていないのだ。又、そうしようという、心構えすらないということだ。時の流れ、時代の要求という人がいる。誰が要求し、誰が、その流れを作ったのか。

これは、決して言葉尻をつかまえての、単なる嫌がらせではない。空手道と言い、カラテと言っても、本当は、呼称などどうでもよいことだ。中味が、心構えが、道としての基盤に立つものならば構わない。此の私自身にしても、余程の場合でないと、空手道とは言わない。「私はカラテ屋です」などと嘯ぶくことすらある。実際に、カラテで飯を食っている人間の一人として、当然のことだとも思っている。「空手道」と固苦しく言うことが立派だとも思っていない。要は、心構えの問題だ。カラテを習いたい人には、カラテとして応えよう。空手道として、道に志す人々には、謙虚に、共に道を語ろう。

道ならば、歩かなければならない。進まなければならぬ。止まったり、退いたりすると、邪魔になる。殆どの人が、カラテの世界に止まって、発展、進歩がないといっても、過言ではなかろうか。「カラテをやってるよ」と、昂然と肩をそびやかす姿に、表象されている訳だ。進歩、向上するというより、むしろ逆に、誤った方向へ、迷路へと、踏みこんでいるように思えてならない。

非常に体力的なもの、競技としての、試合を中心としたカラテ、或は又、精神修養としてのカラテというだろう。如何なる苦痛にも堪えるような、強い根性を養うというであろう。然し、「空手道」は単なる、所謂精神修養だろうか。単なる苦難苦行であってよいのか。空手道は、単に倫理道德の爲めのものではない。体力の向上も、精神修養も、倫理道德も、稽古の要素の一部分ではあっても、全てであってはいけない筈だ。

空手道は、心と体、一人の人間が書き出す、最高の姿を求めるものといってよいだろう。又、大宇宙、大自然の、そのままを体得し、それを空間に書き出すことだとも言えよう。或る時は、音楽的に又或る時は、美術的に表現されるもの、芸術とみてよいだろう。

人間としての、最高の姿とは、どんなものだろうか。それを求めるのが、「空手道」の稽古でなければならない。カラテでなく、空手道を志すべきである。

弱肉強食。それも又、自然の姿というだろう。強くなければ、食われてしまうと言う人もいるだろう。然し、それは、動物以下の世界、動物以下の心を持つ人の言。霊性を持つ人間の世界ではない。然し、現在の世界だって、強い者が巾をきかし、栄えているではないか。そういうだろう。では、将来もそうか。その儘続くかと聞けば、誰が答えられる。力に驕る者は、必ず亡び去っているのは歴史の示す処である。栄枯盛衰を何と見るか。だから、弱肉強食、勝った負けた、ただそのことのみ、終始する武術、武道を、畜生剣法と喝破した先人があるのだ。」(文献37)

3-4. ま と め

江上茂の空手道思想の中核には「平法」という概念が置かれていた。江上は井上方軒と会うことによって、中国から伝来し、日本に古くから伝わる「平法」という思想を知った。また、井上に触れることで、その境地が体技、心技として、具現できることも体験することができた。しかし、そのように井上から見聞きした「平法」という思想を単に「空手」に移入しようとしたわけではない。自らが指導する「空手道」とはいかにあるべきかを探求・確立する中で、師匠である船越義珍が「唐手」から日本「空手道」へと昇華させる中でその中核として掲げてきた「真の空手」「空手道」の思想が「平法」の中に息づき、またその延長として進むべき方向にあることを自得したからである。

そして、「平法」を空理空論にとどめず、稽古の世界で実際に具現し、また多くの門人たちを導くためにはどのようにしたら良いか、このことに専心していたことがわかる。また、「平法」に基づき、「真理への道」「至上最高への道」を目指す「空手道」において、試合は成立しないものと結論している。これも、単純に船越の思想を無批判に追従・模倣したのではなく、探求

の上に自得した思想と境地において結論付けられたものと言えよう。

「はじめに」で述べたように、中山正敏は「空手」に試合を導入することによって普及に成功した。しかしながら、普及の反面で中山自身すら「空手道」の本質からの乖離を感じるものへと変貌を遂げていってしまった。一方、本論で取り上げた江上は、それとは対照的に試合を否定し、あくまで武道としての「空手道」、船越義珍の目指した「真の空手」「空手道」を徹底的に追究し、「平法」という姿へ導きつつ普及した。そこでは「物心一如、絶対の境地に到達することを稽古の最終目的」にしている。このような道を辿った江上の「空手道」は広がらなかったのだろうか。例えば、競争社会といわれる欧米諸国においては、フランスの^{むらかみてつじ}村上哲次（1927（昭和2）年-1987（昭和62）年）、イギリスの^{はらだみつゆけ}原田満典（1928（昭和3）年-）、アメリカの^{おおしま}大島^{つとむ}劫（1930（昭和15）年-）、スペインの^{ひるまあつお}昼間厚雄（1941（昭和16）年-）、スイスの^{ふくとめきろく}福留麒六（1947（昭和22）年-）、いずれも江上の薫陶を受けた弟子たちがそれぞれの国をベースに多くの地域に空手を普及し、受け入れられ、その稽古の流れは現在も綿々と続いている。あるいは、没後32年（2013（平成25）年）、組織とは関係なく、遺族を中心に開催された生誕100年を記念した「江上茂を語る会」に対して、世界11か国から500人以上の参加者が参集した事実をどのように捉えるべきであろうか。「平法」について取り扱った節（3-1-2）では、「平法」の実践は、接することで幸せになるような存在として実在する境地に達することを示した。このように普及が進んだ事実の背景には、江上の教えが真理に訴えるものであるばかりでなく、まさに江上による「平法」の実践があったと解釈することができるのではないだろうか。また、江上の弟子は多く存在するが、職業的な要素から数名を取り上げると、実業家として成功し、三菱地所株式会社の社長や会長を歴任した高木丈太郎（1927（昭和2）年-2016（平成28）年、第3代松濤館館長）、新たに自らの道「新体道」を拓いて職業家となった青木宏之、空手を始め武道や東洋身体技法を学問的専門領域として中央大学の教授となった宮本知次（1946（昭和21）年-）、政治の世界では4期の衆議院議員や3期の大分市長を務めた^{きのしたけいのすけ}木下敬之助（1944（昭和19）年-）など、多彩な人材を輩出している。「平法学」には「人間学」の側面が存在し、人間洞察を通してあらゆる道に通じることも示した（3-1-2）。このように江上を信奉した弟子たちが、稽古を続けながら、それぞれの分野で自らの道を開花させている事実は、その人間洞察を通して江上が「平法」を実践していたことの証左と捉えることができる。さらには弟子たちもその実践を継承しているということもできるのではないだろうか。

江上は「平法」という崇高な思想を自らの「空手道」思想の中心に掲げるとともに、それは稽古、生き方の1つ1つの実践なくしては成り立たないものと考えた。したがって、自らの生き方においても実践、追及するような姿勢と考えを持っていたと考察できる。

4. 結 語

2016年、リオデジャネイロにおいて開催された国際オリンピック委員会 (IOC) の第129次総会の議題として、2020年に開催予定の「東京2020オリンピック」における追加競技について討議され、2016年8月3日 (日本時間)、「空手」が東京2020オリンピックの追加競技に決定した。オリンピックに採用されることによって、空手は競技スポーツとして、今後、より一層盛んになるであろう。しかしながら、競技は試合を前提としており、これは元々、船越義珍が醸成し、江上茂によってさらに深化された「空手道」の思想においては、何ら発展と呼べるものではなく、むしろ空手道がカラテへ逆行していくことを意味する。表向きは「平和」を唱えながら、内実は「闘争」の世界でよいのであろうか、江上はそのような問題提起をしているように見える。理論と実践が伴うことの要求は、何も武道に限ったことではない。そのことをどのように考えていくのか、今後の空手の発展のために、本来の稽古の目的や意義は何であるのか、船越が醸成し、江上が深化させた「空手道」を通して、もう一度その将来像を考え直してみる必要があるのではないだろうか。本論がその一助となれば幸いである。

注

注1) 江上が教官を務めた陸軍中野学校は、秘密戦要員養成機関を設置するための過渡的措置として1938 (昭和13) 年7月に千代田区の「愛国婦人会本部別館」内に設置された陸軍大臣直轄の「後方勤務要員養成所」を前身とする。「秘密戦」とは「諜報」「宣伝」「防諜」「謀略」を指し、秘密戦要員とはいわゆる一般的にスパイ・諜報員と呼ばれるものと解釈できる。1939 (昭和14) 年4月、所在地を中野に移し、1940 (昭和15) 年8月、陸軍中野学校令の制定により学校としての形を整え、1941 (昭和16) 年10月より、陸軍参謀総長の直轄学校となる。江上と同時期に陸軍中野学校で学科・一般戦術の教官を務めた伊藤貞利の著書『中野学校の秘密戦』(中央書林、1984 (昭和59) 年)によれば、中期学生の教育課目・教官の表に「術科 空手 江上茂教官」の記載がある。1938 (昭和13) 年7月に入所した第1期学生の教育課目・教官の表には剣道の他に「術科 合気道 植芝盛平範士」とあり、空手は記載されていない。江上の採用が1939 (昭和14) 年であることから、主に1939 (昭和14) 年12月から入所した第2期生以降の教育科目に空手が追加されたと推測できる。

江上自身は退官の理由を明確にしていないが、『江上茂追想録』(p.179)では「民間の困窮、軍内部の腐敗を見て度々非常時なることを上申するも聞き入れられず、よって野に下って国民の一員として国のためにつくす生活を送ろうと決心したものの様である」と推測している。退官当時の陸軍中野学校は、「昭和十七年六月のミッドウェイ海戦の敗北、昭和十八年二月のガダルカナル島からの撤退を契機として、日米両軍がその攻守を逆転、日本軍が守勢に転ずることとなったため、参謀本部は正規武力戦を補うための「遊撃戦」の展開にふみきり、昭和十八年八月陸軍中野学校に対して「遊撃戦闘教令 (案)」の起案と「遊撃戦幹部要員の教育」とを命じた」時期と呼応することから、こうした政策転換に関係する可能性もあるが、真相を明らかにする史料は現段階では見つからない。

注2) 井上方^{いのうえほうけん}軒は合気道の創始者植芝^{うえしばりへい}盛平の甥で、植芝とともに合気道を起した。大本教の出口王仁三郎に師事し、1925(大正14)年より上京して武道教授をおこない、1954(昭和29)年から自らの流儀を親英体道(後に親英体道)と称し、その道を追求した。方軒は1948(昭和23)年から使用している道号であり、生涯に数度、道号を変更しているが、最晩年は鑑昭^{のりあき}と名乗っている。

参考・引用文献

- 1) 宮本知次・中谷康司・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘(2005) 空手道の近代化をめぐる船越義珍に関する研究課題, 中央大学保健体育研究所紀要 23: 95-127.
- 2) 中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘(2007) 空手道の発展における地域的2軸性: 沖縄と本土, 中央大学保健体育研究所紀要 25: 27-65.
- 3) 中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二(2008) 空手道近代化の特徴—柔道との比較における考察—, 中央大学保健体育研究所紀要 26: 25-44.
- 4) 青木清隆・中谷康司・宮本知次(2012) 船越(富名腰)義珍の空手道思想に関する研究, 中央大学保健体育研究所紀要 30: 35-55.
- 5) 青木清隆・中谷康司・宮本知次(2014) 中山正敏の生涯と空手道思想, 中央大学保健体育研究所紀要 32: 35-55.
- 6) 大倉二郎 編(1981) 江上茂追悼録, 日本空手道松濤會, pp.1-182.
- 7) 江上千代子(1993) 君影草, 江上尚志, pp.1-346.
- 8) 江上健 編(2013) 江上茂生誕100周年記念誌, 江上仁士, pp.1-191.
- 9) 内藤武宣 編(1982) 早稲田大学空手部の五十年, 稲門空手会, pp.127-145.
- 10) 伊藤貞利(1984) 中野学校の秘密戦, 中央書林, pp.1-300.
- 11) 加藤正夫(2001) 陸軍中野学校, 光人社, pp.1-226.
- 12) 斎藤充功(2008) 陸軍中野学校の真実, 角川文庫, pp.1-297.
- 13) スタンレー・ブランニン(2001) 親英体道 井上鑑昭道主回想録, 季刊 合気ニュース127(冬号): 16-20.
- 14) 江上茂(1973) 遊天先生空手道指南・第二回 技の変遷について, 空手道 4(日本空手道松濤會): 4.
- 15) 江上茂(1974) 遊天先生空手道指南・第三回 技の変遷について, 空手道 5(日本空手道松濤會): 4.
- 16) 江上茂(1977) 空手道入門, 講談社, p.14.
- 17) 浜田純三 監修(1981) 江上茂追悼文集 江上先生と私, 東邦大学空手道部松濤會: 150-177.
- 18) スタンレー・ブランニン(2001) 親英体道 井上鑑昭道主回想録, 季刊 合気ニュース127(冬号): 16-20.
- 19) 江上茂(1977) 空手道入門, 講談社, pp.9-10.
- 20) 浜田純三 監修(1981) 江上茂追悼文集 江上先生と私, 東邦大学空手道部松濤會: 150-177.
- 21) 森田栄(1996) 源流剣法平法史考, NGS, pp.124-185.
- 22) 加藤花刀斎(2004) 平法—兵法とは平法也—, 岩崎電子出版, pp.93-94.
- 23) 鷹尾敏文(1977) 平常無敵流平法, 武道の神髄(佐藤通次・鷹尾敏文共著), 日本教文社, pp.147-151.
- 24) 鐵屋昭(1994) 歴史に学ぶ心学の武道 平法学小太刀, 展転社, pp.1-3.
- 25) 青木清隆・中谷康司・宮本知次(2012) 船越(富名腰)義珍の空手道思想に関する研究, 中央大学保健体育研究所紀要 30: 35-55.
- 26) 江上茂(1970) 空手道 専門家に贈る, 楽天会, p.14.
- 27) 江上茂(1970) 空手道 専門家に贈る, 楽天会, pp.23-24.

- 28) 浜田純三 監修 (1981) 江上茂追悼文集 江上先生と私, 東邦大学空手道部松濤会, pp.150-177.
 29) 江上茂 (1977) 空手道入門, 講談社, pp.33-94.
 30) 青木清隆・中谷康司・宮本知次 (2012) 船越 (富名腰) 義珍の空手道思想に関する研究, 中央大学保健体育研究所紀要 30:35-55.
 31) 江上茂 (1965) 平法秘奥, 空手文化 創刊号 収録 (私家版, 発行人高橋是休, 2001年発行):19-30.
 32) 江上茂 (1965) 平法秘奥, 空手文化 第2号 収録 (私家版, 発行人高橋是休, 2003年発行):9-28.
 33) 江上茂 (1965) 平法秘奥, 空手文化 第3号 収録 (私家版, 発行人高橋是休, 2008年発行):10-20.
 34) 江上茂 (1977) 空手道入門, 講談社, pp.7-14.
 35) 江上茂 (1970) 空手道 専門家に贈る, 楽天会, pp.32-34.
 36) 江上茂 (1970) 空手道 専門家に贈る, 楽天会, pp.10-16.
 37) 江上茂 (1970) 空手道 専門家に贈る, 楽天会, pp.27-31.

付表 「江上 茂」の生涯年表 (主に空手関連事項のみを記載)

西暦 (和暦)	年 齢	出 来 事
1912 (大正元) 年	0 歳	12月7日, 福岡県大牟田市 (市制施行, 大正6年) 宮ノ浦町に江上平, ハツの次男として生まれる。
1922 (大正11) 年	10歳	船越義珍が東京で空手道の指導を始める。
1931 (昭和6) 年	19歳	早稲田大学第二高等学院に入学する。早稲田大学第一高等学院に空手部が創設される。
1933 (昭和8) 年	21歳	早稲田大学商学部に入學する。早稲田大学に空手部が設立される。
1934 (昭和9) 年	22歳	下田武師範代が亡くなる。
1935 (昭和10) 年	23歳	船越義珍『空手道教範』(廣文堂) が出版される。
1936 (昭和11) 年	24歳	3月, 早稲田大学商学部を卒業する。就職せず。 兵役検査で甲種合格を受け, 12月に久留米歩兵第四十八連隊に入営するも, 肺結核が発見され4日後に帰される。
1937 (昭和12) 年	25歳	兵役検査で二度目の甲種合格, 二度目の入営。平壤の高射砲連隊へ現役入隊するも, 肺結核再発して, 陸軍病院へ送られ, 本国送還となる。
1939 (昭和14) 年	27歳	陸軍省兵務局軍事調査部に入職 (陸軍中野学校教官) する。
1941 (昭和16) 年	29歳	9月20日, 『増補空手道教範』(廣文堂) が出版され, 付録「大日本空手道天之形」の表紙写真に採用される。 12月30日, 山口幸次郎, マツの長女, 千代子24歳と結婚する。
1942 (昭和17) 年	30歳	10月6日, 長男, 尚志生まれる。
1943 (昭和18) 年	31歳	10月31日, 陸軍省を退官する。 郷里大牟田市に帰郷し, 兄の建設業を手助けする。
1944 (昭和19) 年	32歳	兄, 薫が出征したため, 家業を継ぐ。
1945 (昭和20) 年	33歳	2月, 兄, 薫が亡くなる。 4月25日, 東京大空襲で松濤館が焼失する。 6月26日, 次男, 仁士生まれる。 8月15日, 終戦を迎える。奥山忠男と一緒に共同生活を始める。 11月, 船越義豪師範代が亡くなる。

1947 (昭和22) 年	35歳	9月13日, 三男, 正威生まれる.
1949 (昭和24) 年	37歳	10月20日, 長女, 真理子生まれるも, 間もなく亡くなる.
1953 (昭和28) 年	41歳	5月, 中央大学で夜間稽古が始まり, 指導する. 8月, 早稲田大学空手部監督・正課体育講師に就任する.
1955 (昭和30) 年	43歳	9月, 学習院大学空手部師範に就任する. 早稲田大学空手部監督, 正課体育講師を辞める (後任は奥山忠男). 井上方軒と出会う.
1956 (昭和31) 年	44歳	1度目の開腹手術を経験する.
1957 (昭和32) 年	45歳	4月26日, 船越義珍師範が亡くなる. 5月11日, 船越義珍師範の葬儀が東京雑司ヶ谷崇祖堂で執り行われる. 9月1日, 東急空手道場が開設され, 師範に就任する. 10月, 中央大学空手部師範に就任する.
1958 (昭和33) 年	46歳	4月, 東邦大学空手部師範に就任する. 2度目の開腹手術を経験する.
1959 (昭和34) 年	47歳	親和体道会名簿に江上茂の名前が見られる.
1961 (昭和36) 年	49歳	3月2日, 船越義英 (松濤會第二代會長) が亡くなる.
1963 (昭和38) 年	51歳	12月1日, 船越義珍著『空手道教範』を日月社から再刊する (写真の演武を務める).
1970 (昭和45) 年	58歳	11月, 『空手道～専門家に贈る』(楽天会) を出版する.
1973 (昭和48) 年	61歳	11月, アメリカ西海岸, ロサンゼルスへ招聘され, 指導する.
1975 (昭和50) 年	63歳	12月, 本部道場として松濤館 (港区芝浦1-4-2柏木ビル) が再建される.
1976 (昭和51) 年	64歳	1月15日, 江上茂, 館長に推挙され, 第2代館長に就任する.
1977 (昭和52) 年	65歳	6月, 『空手道入門』(講談社) を出版する.
1978 (昭和53) 年	66歳	2月, 台湾へ指導旅行する.
1979 (昭和54) 年	67歳	12月, 平病院に入院する.
1980 (昭和55) 年	68歳	この年, 年頭よりからだの調子を崩す.
1981 (昭和56) 年		1月8日, 午後7時15分, 肺炎にて亡くなる (享年68歳).
1991 (平成3) 年		5月20日, 妻, 江上千代子が亡くなる.
1993 (平成5) 年		5月31日, 江上千代子著『君影草』(同成社) が出版される.
1995 (平成7) 年		4月, 高木丈太郎が第3代松濤會理事長・館長に就任する.
2013 (平成25) 年		2月16日, 生誕100年を記念して「江上茂を語る会」開催される.
2018 (平成30) 年		7月, 日貿出版社より型についての遺稿が『空手道型教本として出版される (予定). 注: 当時, 出版用に撮影された実技写真 (演武: 宮本知次) を附し, 宮本知次の解説を加えて, 上梓される.